

2019年度 北星学園附属高等学校に関する第三者評価

はじめに

本校は、評価（第三者評価）は、コアネット教育総合研究所研究員川畑浩之氏を評価委員に委嘱して実施した。入学時のアンケート調査と年間数回の管理職との対談でヒアリングとアドバイスを委託した。以下、氏のレポートを抜粋して報告とする。

1. 各種アンケートの結果

2017年より入学者を対象とした「アンケート」を実施している。「本校に期待する点は何か」という項目の回答である。最も期待されている点は「面倒見のよいところ」「英検などの資格指導」、一方、「キリスト教精神に根ざした教育」への期待は小さいという結果である。これは、公立中学校では、宗教教育や宗教的な価値観に基づく教育活動を経験していないため、生徒はイメージできていないこと、また本校の根幹である活動でありながら、生徒募集上で十分にPRできていないと推測する。しかし、卒業時には認識が変換している点は、教育特徴が実践に基づいていることが浸透している結果ではないか。

2019年度は、ICT利活用の教育を推進するプロジェクトが、前年度の構想段階から、具体的な導入段階へと前進させた。今後は、ICTを活用した教育プログラムが、どのように形作られるのか、同時に外部に発信されるのか注目したい。未だに黒板とチョークを使った授業の枠組みから抜けられない教員もいるが、年齢の若い教員、活用に意欲的な教員が全体に負荷がかからないスピード取組んで改革されることを期待したい。

また、男女での違いとして、期待する点は大きな差異はない。男子は大学受験を意識し、女子は英語や基礎学力の指導など、きめ細かな指導を期待していると言えよう。

英語の少人数展開授業の実施などを通して、生徒が求める教育に対して、推進できる環境づくり、教職員の意識の涵養は必要となるだろう。

2. 期待される教育を創造し実践するための取り組み

本校はキャリア教育の一環として「探究」の学習活動を推進しており、魅力のひとつである。今後、附属高校として、系列校との高大接続改革の方針や、ICT利活用型の授業の取り組みなど、新しい学力観に基づく教育を推進している途上にある。

管理職へのヒアリングでは「現在、本校はキリスト教の精神に基づき、大学の附属高校としての存在意義を確認しながら、教育の点検と見直しを行っている。例えば、学内で「将来を考えるプロジェクトチーム」を作り、学内で討議を重ねている」と報告があった。ここ数年の入学者の増加は、これらのことがある一定の中学生と保護者を惹きつけるものがあったのではないかと予測する。

2019年度も「新しい学力観」に基づく「新しい授業」を実践することを目的として、教職員のスキルアップと教育環境の整備を計画して実践した。

推進委員会による ICT 利活用の先進校の学校視察などは、情報収集および教員の意識を涵養することが目的であり、「教職員の議論が進んだ」(校長へヒアリング)ということで、評価できる取り組みである。

また職場での情報共有や働き方改革の一環として、ICT 利活用により、協働や業務の効率化を図ることをねらいとした仕組みづくりを模索している。この点も大切な改善活動と言えよう。

3. 「校長による学校評価への文書」を受けてのさらなる提言

校長が課題意識としている点が多いが、伝統を否定せずに、大切にしてきたものを継承しつつ、保守的な学校システムの改変を進めようとしている努力が分かる。

クラブ活動を中心にした学校作りから、クラブ活動も含めて、教科指導、ホームルーム指導、学校行事、総合的な学習、キリスト教活動などを通して教育を構築していこうという一貫した姿勢が、全体に浸透することができるならば、もっと大きな前進になることを期待する。組織的な改善活動ができることを期待したい。

～新しい教育を推進するために、新しい発想で「教室」「職員室」の環境整備

(文責：コアネット教育総合研究所 川畑浩之)